

学位被授与者氏名	刘 彩平 (りゅう さいへい)
論文題目	<p>汉日语感觉形容词认知扩展用法的比较研究</p> <p>— 以味觉形容词和视觉形容词为中心</p> <p>(中日感觉形容词における認知拡張用法に関する比較研究</p> <p>— 味觉形容词と視覚形容词を中心に—)</p>
論文審査結果の要旨	<p>「五覚」(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)を表す言語表現は直接に人間の認知結果を反映するものなので、認知言語学に欠かせない研究テーマとしてこれまでによく研究されている。特に日本語の「甘い」と英語の sweet、中国語の“甜”などに関する研究はいちいち挙げられないほどの数である。また研究の歴史も長く、近頃だけでも1960年代中国における「通感」の研究、1980年代日本における「色彩語」の研究などが挙げられる。膨大な先行研究に対して、認知拡張用法の最も多い2種類を選んで、先行研究にやや手薄な「種類全体についての集中対照」を研究対象にし、修論として適当であると考えられる。</p> <p>第2章の「味覚から生理感じ」、「味覚から人物性格」、「味覚から程度・数量」などのまとめ、第2、3章の「両極の味覚を表す形容詞の派生用法が多い」、「認知派生用法が品詞の変化を引き起こす」の結論は、すべて従来の研究に言及されていないものではないが、ある程度の新鮮感があるように認められる。</p> <p>しかし、本論には分析がないわけでもないものの、資料の羅列がメインになり、論文としての構成、各部分の間の繋ぎにも適切で十分とは言えないところがある。味覚形容詞に対する研究の一部、色彩語に対する研究の多くの内容は言語用法の対照分析と言うよりも、むしろ文化的な「実例集」になってしまったと言うべきであり、「研究論文」の性格をもっと出さなければならないと思われる。</p> <p>平成27年2月13日に、北九州市立大学北方キャンパス3号館320教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(中国言語文化)として十分な内容であると判定した。</p>